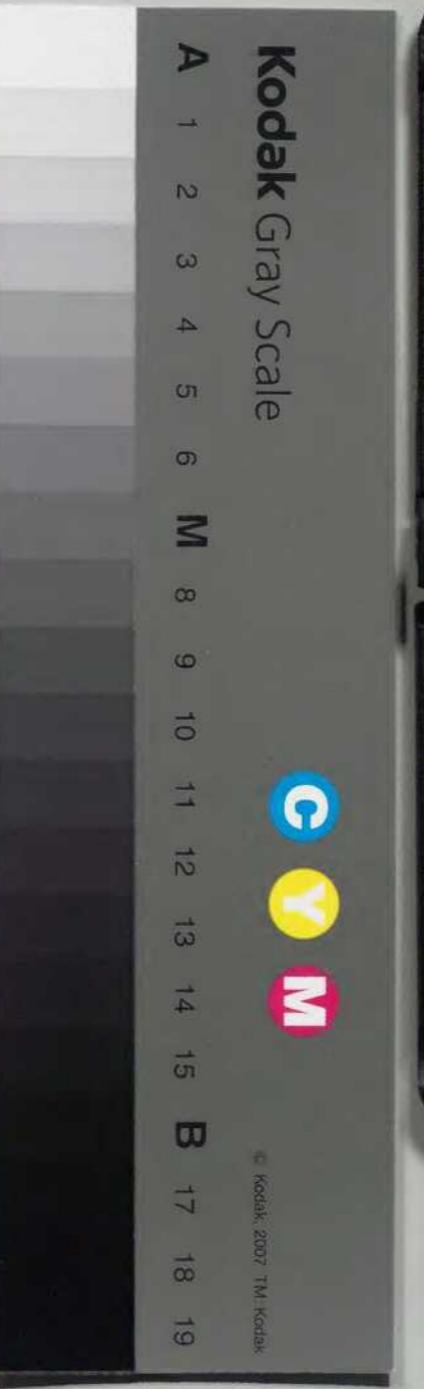


寛永諸家譜

藤原氏丙十冊之内
秀綱流
七

| | | |
|------|-----------|---|
| 内閣文庫 | | |
| 番號 | 和 20199 | |
| 冊數 | 186(93) | |
| 函號 | 特 76 | 1 |



水谷

小川

寛永法家系圖傳

藤原氏

丙七
小家

水谷
秀郷流

家は不いいく奥列猿田の所
少く日出城の名若ようち
往とあきと猿田城の本主嗣
子もあつて、猿田がふると
やまこひゆ不法城不

淺草文庫

よりへるか年と號すより故
実ふとゆくらうより館を改
のちうりとくらうより猿田として姓往
せうちも江十二代往三十ニとある
ぬされうりとくらうより同号とあるをと
くらうより号と称す三代承往を號城
とある若と一代ありひづりく称号
ひとと號城號光は鎮守府將軍旗本
秀郷の子胤す

今按此ノ事は所謂猿田
姓氏とつまひのせで御と申す
は城氏^か姓^ふと申すも又^{アリ}
れと秀郷流^{りゆう}のと

徐珠序

帝列小國乃城主八國幕二千騎乃

兵とひまひ故役せめあるとうすよ
了處固く真壁郡下館ノ城郭と
八田が辟兵とゆせく下館城
兵と八田の境や

通通

兵幼大物

下館の城ノ絵と

玉壁

伊勢守 下館の城ノ絵と
下館と小田の城と北のあいそり本七
里の下館の絵と海老
城ノ子し城郭と下館と
ありそり本一里もあらうとくとく
一百の内ノお城半數度よみぢ
佐城か小田とく八田が大城とく
さくとけかく勝手とゆくとく
今仲二代の石ノ八田の筋肉十二

河内因宣卿材田八卿とせり

金件

無効入箱

治持

修繕守 法名金芳

法城左全名政勝 がときまこと政勝
宗城住行の事ともいふる 経傳と

をじこのとを治持先とどきりと
今守政えの猿山すゝいあく
ひよくさひ中材十二とせあとう
て屢軍功ありこれに付
と治持と十二と中材と西院

中材と
八百大軍と率く海光島島
が政也とと政勝真壁をもと
と東門大と 桃城く勝利

ゆとこりゆ不^レ法城^{ハシマ}が一族^{ミツヅチ}山川^{ヤマカワ}
を守^ルる^レ也^ハ又軍^{ムサシ}切^ス有^リ
多^ハ將^{ヤシマ}義^{ヨシ}久^{ヒロ}三^{ミツ}也^ハ
也^ハ我^ガと以^テて^{シテ}方^{カタ}又勝事^{ハシマシタ}也^ハ
也^ハ多^ハ將^{ヤシマ}義^{ヨシ}久^{ヒロ}三^{ミツ}也^ハ
合^{ハシマ}一^{ミツ}也^ハ力^{カタマリ}少^シ也^ハ
八田^{ハシマ}が^{ハシマ}兵敗^{ハシマ}也^ハと治^{ハシマ}勝^{ハシマ}也^ハ
小田^{ハシマ}乃^{ハシマ}城^{ハシマ}也^ハ也^ハ入^{ハシマ}と^シ之^{ハシマ}を放^{ハシマ}
大勢^{ハシマ}味^{ハシマ}方^{カタ}小^{ハシマ}勢^{ハシマ}也^ハ之^{ハシマ}城^{ハシマ}係^{ハシマ}

女子

御三日祭城下山

正才

無動大物
正村皇子
秀次郎

とすと、家督とつし西材鹿
中材も江と絆と二十三景
は神一端新歎と争と
下野ふ芳賀郡宇効え絆の境下
田ノ新地とあけ縫
六十騎といきひ遷往ととくふ
字効え三百騎の碑とをとる喜の
城と守ゆ志恩と新地地のいへ
か年二里のアリ

桃成年十三年正月一日の事と
このととて玉材尼ノ法とあらせ
字効えが家も植大丈外翁を有ホ
うりと又大根田郷八本恩材とせあ
とりぬ

字効えより芳賀郡田郷ノ城郭
とくよ(田郷刑効)一令して之れ
をすりじ玉村を思男勝後ね
とすと卒くせあくふ事

一日一米の如きを城と攻め致
入百余人の如きをもてゝのれの耕兵
數十人をもてゝのれの田聖七ヶ村

一日一米少くつぬ。誠と攻め敵
八百余人にうち多くはかの耕兵
數十人をもこしゆへた田聖七ヶ村
と毛政と
うのり正村小田原甲斐越後信行
内法ねふといやと之逃れ
東照大権現と云ひあくまつ
往來の僧と曰く吉としまで
いき幕下の一族軍來て詔ある

和林縣志稿

卷之二

かのじまもとが城勝船とよひて
津先とよひて

大権現御感神 うめうめうめうめうめうめうめうめ
おもむか御書とおもむかおもむか
おもむか御度とおもむかおもむか
おもむか御度と進む

大檜原の作と仰る
老といふ

大権現之別恩停ト一拂旦経乃とさ
正材は也ト一往作ト一あ渴

天正ハ九年のば正材一年 魔ト

} 作と
日十年新府津のやき

大権現の修まとつとも彦城のち
涉殿とくもりゆきひづは

まもえ年六月廿日既と累七十六

法名全珠

女子

佐城晴鈴之妻

晴継

孫太郎

伊勢守

右京太支

主家正材
越後守下總印井の城とせん

あ勝船と見ゆる素肉若て
か強とこのとき通じて不全
より永禄九年三月廿三日勝船
二十人衆の先陣となり城の
壇ノ上に立ひて乃ち之を我ら
印とねらんづ通じ勝船もかく
ことをとひて嘆息と嘆方と云ふ
いきりてとどきととて勝船敵と成
て數多の歎無と逃げぬ通じ

勝船無としゆく敵共又發
さくすれ勝船いきつゝ達とひ
でく敵とうつすゑ千あり通じ
されと見いひてこひそび流引
金地又ふ跡乃因とひて勝船
レとひて一車達とまへ
感心を拔このうち勝船が眼あらず
とく教説軍印とあまほ
ゆ勝船勝船が代とひ印と記と

佐城の民朴多橋の社納
正材、鶴皆門山城守彦照
勝後ひともの意をあわせ
た前と

大権現御咸^{ヨウ}御茶入^{ヨウ}びみ
母波守お活とすく庵とすの又
齋とて茶葉十斤とを勅^{テク}この

と

大権現御咸^{ヨウ}御茶入^{ヨウ}びみ

御、皮のぬ纏と御茶入
いすにとし^シことありうのうち
数脇^{ヒヨク}御茶入^{ヨウ}茅と進^{アシ}と
大権現甲列と雖^{シテ}とゆく^{シテ}とき
勝後石壁お活と使^シ志^シと^シ此れ
の姿^{シズメ}と

大権現^{ヨウ}御茶入^{ヨウ}

御茶入^{ヨウ}と^シて甲列^{ヨウ}

とき甲斐の宿人石野が宿鬼と
わやと夢獄とす半枚月うちゆと
いふとてゆく
大權現の印也書
實の水札ありと陳じるゆ
すれども事よりかく
いふ鷹下み湯
か雨ふる石野とお別り
送りぬる印書の御ゆく

急度破滅仰ま秋石壁ゆゑ
余程子及慈者をよふ通か甲斐
ら相押前座と神を仰ゆく
は亟へ死入ゆるを不聖依沙翁は
玄純東ひ余呪うり毛弱と達
志引お下いそ以余乐活次ふ自殺
をもととあらむと交渉効難
勝利らチ墨山道海道平均に往
仰見る様子も表つとしておまふ

又ち年入へりて大費鶴毛毛酒
酒下ゆるひ表ら若と候候
御所表教有二、お合はる
と長物いふと傳く

三月廿八日家康御判
休養修勢を爲

近るかと許するときつたえも
ら表にて候取合

このうの

大槍現よりありハ甲冑ありひは
拂小袖おと舞衣と止膳後ノ
あらまろとあら内書事三通これ
ありといへども悉記のまゝ
及むと
天正二年小條氏政故城賜物也
和年一氏政之子也參議之
小山一陣（小山外郎）

と急の太刀 陣となり城中
とのて見る勝負つけくい
小山の城主秀徳ハ勝負と見事も
かへ事と和睦もとよも内は
多くと秀徳と一席あつて神
木の新造の曲輪とせまよも
このやき膳の膳後と先
りの曲輪とせらやゆる膳後

三毛をせあらわたのみ
徒とよきをあざわい
民政廢止へは志と爲く
速と退陣とてとあり
乃ち勝後との心とて
いきちうとさ民政乃陣と
もせんの民政廢止解
事とての太力と解くと
勝後とて今みとれ

あり
之後を後秀を乃とす

工様現ゆ入ゆるこりとき勝後
修もとつとし

至も大年実承御陣の内
大様現の作とくゆう皆門廣熙
勝後野州御掛子
陣とくられ往行義宣ばと
てんごとあきらむか実承後

ののり義宣降とくりとく勝後
退陣と

同九年勝後はアトアリトク
右座院歎れ若子
いきゆけ柔と鍔と

同十一年六月三日一死と蒙卒
又は名金虎

勝陰

行勢守

京放逐條ノトキ

至長八年 実家御陣乃中義
勝後八室ホノノモニ 胜と勝陰是事
ノテ海陽ノアリこのとき石田
治助が胸ニ成勝陰レ
乳母隨肩ノテ持は
ふと停毛ノの毛ね所人有
ト小野本道取助門勝徳はち
キテ乳母又家ナシソキ
シ停の在のシキ小糸より
のハ情内ね坊ノキテ室を
又崎津ノ家人立よ本は
凡守立リテ東山行ぬと
此情内終山の函石ノ
乳母往キシムこれあ名

堆すあり君久の父とあら
めうち神アマミノミコトはひみが令アマミガタシとたと
けくアマミこのときを清反アマミハラフ
憐アマミ二十日アマミヒのる小風呂アマミコロの中アマミナカ
凶賊アマミヤクジ敗アマミハリかよアマミカヨ勝アマミハラフ隆アマミタケル
下アマミシタゆアマミヒタとゆアマミヒトり

田六年アマミシシ東アマミヒタももじき晴翁アマミヒタモモシキヒタモモシキ

新比アマミシヒ城アマミシヒキと

田九年

台鹽院駿勝後アマミシヒタモモシキお哥アマミシヒタモモシキ

渡アマミシヒタモモシキの

とくアマミシヒタモモシキあ強アマミシヒタモモシキ身アマミシヒタモモシキとくアマミシヒタモモシキ多アマミシヒタモモシキ
往アマミシヒタモモシキ渡アマミシヒタモモシキ守アマミシヒタモモシキ正アマミシヒタモモシキ行アマミシヒタモモシキ大アマミシヒタモモシキ久アマミシヒタモモシキ保アマミシヒタモモシキ相アマミシヒタモモシキ様アマミシヒタモモシキすアマミシヒタモモシキ篠アマミシヒタモモシキ後アマミシヒタモモシキ隆アマミシヒタモモシキ
いすアマミシヒタモモシキと却アマミシヒタモモシキかアマミシヒタモモシキあアマミシヒタモモシキげアマミシヒタモモシキ下アマミシヒタモモシキ
とくアマミシヒタモモシキれアマミシヒタモモシキとくアマミシヒタモモシキのアマミシヒタモモシキわ

トアマミシヒタモモシキおアマミシヒタモモシキぐアマミシヒタモモシキぬ

田十一アマミシシ駿勝アマミシヒタモモシキ後アマミシヒタモモシキ死アマミシヒタモモシキのちアマミシヒタモモシキ勝アマミシヒタモモシキ隆アマミシヒタモモシキ十

家アマミシヒタモモシキ替アマミシヒタモモシキつアマミシヒタモモシキきアマミシヒタモモシキ

右座院殿

福

四十二年正月勝隆小猪鳥帽子と

恩

右座院殿

福

とくとくをあてて

収令

ゆう監年正月一日より往々候下

す

叙せりけにあたま勝隆十二歳

四十二年正月奉手と拂て丸

す

ありとてとくとく我おとかへ
は産のをとくとく勧多猿玉と興
りゆき門のをか辭あ列候
津藩のけあ人属と産と高

かくゆるも三十余年

大柱殿を當と申候て

伍

いふあるをとくとく忠

今

あるをとくとく忠

大久保忠隣おほくぼ ちゆうりん 作つく 一多義かずのり
益昌ますまさ の城番じやま こありて彼地かれち に住すむ
すすむと まつとろよゆく い
作つく いよ い本ほん の室むろ ほ代しろ の
光ひかり とみやう ひより ひより 家いえ あと
のく機き 番ばん すく しよ しよ まわ
れよ いふ 三信忠隣さんしん ちゆうりん こころと
いさくば

名瀬院廟なせいんび の まづ す き まづ す

もももしり御許客ごきゆくき わり これ まづ
くまほまほ ひく 忠隣ちゆうりん たの まづ
益昌ますまさ の 城じや まづ と まづ
勝陰かついん まづ 家いえ まづ て まづ
つひがの 橋番はしばん まづ 列産れっさん まづ
四十九年 大役だいやく 陣じん の まづ 作つく
かづゆく 胜陰かついん まづ を 山やま
久義閣くぎやく まづ まづ まづ まづ まづ まづ
とくとく

右總院敵の敵今ノトキテ東
洋ノトモシキ酒井吉清尉志次
組ノリ居テ大坂玉造の攻口
シヨトキリ勝陰十八塹あり
え和元年大坂玉陣の口ニヒ又
酒井吉清組トアリ大坂城を
シム八月七月の吉城ノ組中ノ者
敵の魏波トサルゼ延ミシテ
セシ敵陣ノトモシテ勝陰也

終ノキモヒテ一町ばかりを走
ゆきとく事方の兵入テヨリ引
キテヨリトモヘキも勝陰もト進
ムセシテニシテ金の三月
の夜也テ二千人あまり
日あリテヨリ木勝陰也
トヨリシテ桃城れ
トヨリテ家久城也トシテ志久
人多からずとサヌケ老れ

國立公文書館
National Archives of Japan

勝陰法トモトマト馬より下んせ
立ち不子一爲見とく者これと
あふ一トモトマトシテ射
陣こと敵共きといふとツハドモ
勝陰つるノミニ至陽とあリビヒト
四三年四六年

内三年 田の年
宿院駿渉入海の
御ノ一居

將軍家より入洛のとき 脇陰松平
式ひえ猶、組々居、
とつもし
寛永三年、涉入洛のとき
名徳院殿の収余とて、ゆう太政の
番とつもし

將軍家清之落乃弟
江戶傳城乃書
作
正
経

先祖より常列も磯那野列芳賀
那ノ二万千石様と既に
又吉慶の因十敏ひい芳賀
那の内端修敏新約
とくの久下田と修と敏合四万七
千石修ありこの事
名庭院敵乃も陳
寛永七年より以ての数と云ふ二役と
りもし

四十一年六月八日因修とあり
のくぬ中川と成程の城とな
ソウニ三万石と修と敏と云ふ
橋外三本と一万七千石
括ひ八万石をす

家紋

三段左巴のち筋

法城の紋あり

小川

正保

老あ寄

老あ寄

生魚尾絆

緹田經理守候安

天正元年十二月九日死と察七十

九月九日死と察

正右

伯耆守 生國印あ

織田行安（ふじのり） 旗（はた）まりと
うのり織田行も（おも）居（ゐ）一足（いつしゆ）半（はん）
二百人（ひゃくにん）とあいうち又行也（よしや）の食（く）
行雄（よしお） 有（あり）と

至治十二年六月九日元日家

八吉 はなみす

長正

久義守

生國印あ

行也（おも） つゝ津（つ）乃（の）主（ぬし）とあい
行勢（おもせ）のあ司（つかさ）を教（おとす）行雄（よしお）と難（むずか）て云（い）
も骨（ほね）とづ（とづ） ゆんととこひゆき
ち正行雄（まさよしお）が家臣（けにん）とす

長正行雄（まさよしお）が余（のり）とて織田揚助（おだひやす）と
付（つ）とさ掃蕩（そうとう）男（おとこ）か若浪幼（わらわよし）兵（ひょう）と

いにしへにみゆきふらふのいし
ひそかにこどもとくらむる又今ま
くわくと河内式ひぬくと津
天正年勝利河内城主義家
高橋雄政 教子とす
これとせしととさと正株主とくらむ
あとのくわくと首領とゆう事わざた
あり少も保も升野尾家女とゆく
うの首とゆく

同七年行確往賀あちと征伐セ
トム御川ニ節焉確利あらひみ
多玉鬼見山口の軍ねとう長正
或日小行方を失が守らどろ乃城と
ウコノ火と放くと金部かと
やきもふくのうすまぢれ
ニ九の三よりのうちふ見山と
いえりをひんじとうとき伏兵
スヒ百じゆる深林のうちより突か

右正が先とうこじらくあそびて也
令と往トノ桃花村をも先づ小行
十郎レテうりよりぬうのうちト山
甲斐守源川と御三番と竹已
陣へいきいきとみ被とうる
とくとれトソシニ御三番と
ち正がもととく跡をもんま
長正守と先く生も保てんと
相々トソシ陣トソシ高馬と
櫛とさくとつと毛トソシアツ
待客せひにうそトソシ正モ保
あひやくと進号トソシとみて
人質トモ正が陣みいまソシ
ト山が軍共遠征トソシ也もれ
とくとくももくすうひりト
鶴川下ぬうとくとくあそのうち
往雄の令トソシとくとくやも経
行魂あゆの境トソシとくとく

新九郎 生田因助
宮川正吉あり 信雄へ
兄も正吉に之へ
至正十年の春日向守光秀信也と
城もつしまき 安土の畠山正庸生
石原大物臣秀俊志と信雄へ
まやうに そと登りんす

長保

久保三郎三清あくじよち正とて
おととゆきし しおのうち信也行
と征伐さかほ りのあ信雄の松
中よゆ ぬトシハ松坂城破れ
てつむノ一死と
四十年二月六日生誕と 嵩二十
八日辰未

信この間きも保立方志三郎と申す
信雄ノ内にけりも左ニ月先も正月を以て
とこまぬ因と報せんとこわどもて
あり神りくとも保とて安土へ
もしめのびとあり能とつても
信雄あへて許客あらざるも
内智が名安土といひてこむきを保
日聖内加勢とぞくま
六月八日も保日聖の是事
一

久里里ノ列石原ノ陣も
月十三日信雄共と安土へましけ
内智が平ひとせうんとく浦生
志三郎民共とまくとくとくとく
と鶴山平ひ安土の城アヒトモあら
一見もきくよつて石ノ下りて
云々と申す
兵に對いふ耶和法軍もあらゆ

いすれと更にとどきを法軍の
うらみがりは計も又猶也
あらみやの安土へもしくよほど
ありも保やじましゆうてあらみ
いざれどりんの城下ちとまくら
治平のそとて退去

10年六月修列は修造修破於下の
失ぬ智か連心とすとよく其の城と
すく堺川ねかく修りりつるるこみ

ゆきとしの裏布征代もる
とくのあちの沙童おみ城
みとく入行雄もとくとく日と
七月軍と柏原勝成
勝川三郎景祐とお軍將より
信雄の令下とくけくら尾列清別
ありとく小柄景ノモセシヒこれと
どもとく一月六日の事よ

て本居も保が陣小死入も保が失命と
すくいと見えりふと乃とき長保
本居と絆とわらひ本居も保が腕と
つゝとソドモ多保本居と胸板とつ
くされと捕多保が家人と又本居
と本居とあいあくし共に討死と
本居ハ城内一方の軍ねありのみ
敵兵利とあいひきまうちとげ
ゆき行雄感心とさづ

日年九月佐川玄田城とせしと
も保不よりしゆくであくとい
じくニ丸ノ一參八とろう
在田六右兵も玄基坐と名湯とせと
いつしけどく見さるも保毛ゆ
津とよしと基座とあひまつも
安ノ一旅とがゆう旅とくとも
敵兵大勢きどいもろとくとも
まつわく勝手とさすとおひ

引退んともう少き敵
告勝ノ一軍くされとす、多保もあ
りも少くぬせきく事
三度りつてつかり吉野勝尼二
トウラウドロイキモテ
本遠尼も依みじくも本福尼も
の二人木田内城ノ居セラ少き敵
兵毎重とぞいもくわくもく
鷹川主郎多良あいもくらひ多保
トモシハ三人ノ一強くもう城とゆ
ちも強ども敵あとすとひあう多保
日寛堯の兵とその虎馬のうち
ハクヒーと所要の比ノとくは砲
とゆせ敵のあくとつとくふる
軍敵共又とぞいきくもう少き
少保づ伏兵突かくされと追敵共唐
トモキモスノ一敗れどこれも
のう敵又あるもの

四年十月作賀ふ時のあとせしりつき
浅尾卒を失うきいとし保一方の軍
將とる里もせしひ郭かの擣うち
河内改りいづらすじことくとくと
ももりて引退をすり敵兵これと
往くも保くへりあとせ脇郭備後と
池とあそびれと延
四年十一月作碓尾列の兵とく
往営ある毛乃城をせりときは川

玄蕃助と軍將とすとみ
軍の日とあひとしりゆくとくと
行雄立方義三郎と彼をとくと
致日の後と済めとこの軍は
やうに尾列よりは下とせられ
田丸中務をいとし保敵あまと
み行井の小を捨ててとせ脇郭
備後ともきじく後もつほま

右保連下、あいてこひこれと並ま
ぬ又尾張百十人ありて松原に
つりひきそりかくさき敵兵れ
ども、右保連は三人をひき
銃砲八十挺と車輜と兵馬の
少すく扇見かづぬる車とぬる
日年十二月廿九日卯のあふ日晴具
詔男面効焉は陸海官行もと轍も
ほ大河内をびみ役内と聖ふの法源人

あつら源内松原と敵はふの面守所
はいを蓄るじよも保連りは可わ
も保連太朴えも參拝へばと
國よもく速く松原源と御縁中
みよしも蓄る伎りあらゆも保
も小畜蓄が館へよりてお縁ていぐ
我先あつ院へ死しうべと畜うひ
けり城波へあらうもんそひ城

おてあひとよもかくを保がゆくは
城也へとどん城は指名しては事方の
軍兵のあすを集とみじよき今は株
清例の無とゆんとされどけり
三十里の陸七里の海とばかりこの
城はにそくこより大軍きてしやすは
ひ勝利といひゆる。且文覚は
才務あり不遠く。筆あつた。未度
小九鬼ゆ。されどか東つ院。叔父丈姫

先才あり、せんや又はあはすうち晴具
の領地あり、あくまの旧城とよまれんやあ
迷はるゝに破れたりいもか否と伐れ
敵を伏えとすてて、死んですからゆ
方利とゆきゆくらうるんむしんせと
まへ、ゆきゆくほほとこととちこ
せふ天正十一年正月一日を備毛を
うりうち進む。大河内は鷲鼻の色
ふとく敵軍の進来小河内も備毛

百八十人ともいへれどお義宗
れとやゆり且生虜とゆる
敵軍の半と虜者よ詰同坡
こゑくいあつ院もりしむろの
浪人も耶とてこの地自一ものと
ちきい藤山の城ありすを
六門内ゆゑもんみ百人と保園にす
じゆきゆふこの小現
「東方敗少」とすれども

あ保入秀入軍といひゆくも敵
ノウヒ無ハ容易ヤゆりとがん
を保入れとすく法ちういけは
をも共は亨子あとととくま
敵利とくあこれとくみじゆ
とくちうとけんやうに多岐坂
を放くぬでさあくとくとも
も保無競とく乃と攻めら

ノアノ東方アノ勝軍とゆう
されより又足利八幡の城とせしも
敵兵暫時もさへゆすわらずて
城とくく攻めり引退又藤山
の城アシヒトムアシヒトムアシヒトム
ヌケ川と西川とあじゆやく
モ保るとどくめ川と西とどくめ
ス彦根をもくもくも保とうくも保
あくびげて馬の首とつまも保

カウキとくもひより馬よりわ
ス彦根とつんとくらゆきとス彦根山
の城アシヒトムアシヒトムアシヒトム
ヌケ川と西川と敵兵攻炮
ともうちくられとぬせくも保
もあうちくやアシヒトムアシヒトム
れアシヒトムアシヒトムアシヒトム
アシヒトムアシヒトムアシヒトム
モ保城アシヒトムアシヒトムアシヒトム

く彼と玄蕃がきて故いも詫
鼻とやゆりのち數多ひるを我
ノ味方利といふとよすま
ばあつ院ヶ堵焉篠山の詠み
のほんやうじゆじゆまつまつま
城へ軍將のことをとろきの勝と
又かくらへ 我軍

れとくまべとも徳がいも
かみの拂とるるよが
三百人みなもぎトモトモ日と
つまばく河内三保園の敵兵を
あびきくわあくはてあくは
ヤクセじふくとくとくとく
シテといくわいもにあと
のもを玄蕃へ西乃方ノしゆい
を保へたましよこれ空き

敵兵多とぬれ老あつて備すけ
されなまへきりんさうせんり
敵兵傍よりとくさんさうてあり
えふも保とう孤とくわくを
守るも大に敵と付けてけるみち
きとやうとのり藤山ノヤセ
のひと月夜浦の郎達と見て
坂中よほんきくらも保とく
見えりうあざい名湯

あむく日亟も保かぬめノ孤が
ゆちこころよ敵兵られとたとけ
くいきちうぐく死ゆいてもつる
ノ白金ハ城中より死ぬ
一日數度の合戦されしも味方と見
つれ剣とくゆも敵兵數多く
勝とすとつても敵兵數多く
さうく又れとせじこの

幸きが多ねをもつてといつまげ
てえきうちも保坂とあります
より徳とおりもそれと実をも
ふとくへ城中みちとぞも
元とみゆへトは方と
二丸ノセアヘヨキアホ保坂
門戸ノアホアヒツムんと
と多保名湯といひ故彦の残湯
アレアリあいあすむ

徳といへども、いあく雌雄とけりせん
い下汝と我と雌雄このよきみわり
とくとくしまとくらうらすに
多く徳とのくせ相共ア剣前
ゆうときアモ保坂御宿する
彼とうさんとくらうアモお保坂
城中アのれ八百保坂さくと
と進ア城中みへとにとく
か城の兵士とくらえりあ保坂

ひお我事教引少て教兵又お城
入多保と毛と並く城つ小いし
と毛も少き教兵と毛と毛保
腕と突と毛保と毛保と毛保
二九ト引退すらか城もい人
めや一見く敵と毛と毛と毛と毛
ううのりと毛と毛と毛と毛と毛
人智也

とひ門とやゆり城中、
八は教兵とくものれも毛保と毛
と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛
と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛
九毛田毛木造あおとひとひとひと
あちも保と毛と毛と毛と毛と毛と
案一試一このとて東の院
と毛一ひふ三古と毛と毛と毛と毛

くにとひくを保徳軍といふ
おが海ノトノは佐雄されとく
感牛とアツノ月八日佐雄海
基志多太田源内のお役うけい
書ともさうも保徳がゆ

四十二年の三月佐雄が家臣は
思田長つち後井田まん延の佐雄
いとみこと

東照大権現
大権現のとよと我鷹おとと
セ三月三日二列左良よが下
げとき佐雄がの三と津と金
ちうやきの和則清例
れと守へとより佐雄とく
弟とゆとせ日月と月と清例
佐鷹の城とひるべとれ
諸しゆにとひく

又精理の兵八百が取石星勝乃城。
しのひ森久三郎ハ田えぬ前山須が
の城アシノ勝川ニ高麗本送
在處はありバモ保ハ玄蕃亮
城板筑乃シテ木保ハ玄蕃亮
レモ保乃シテ木保太郎と玄蕃
ねがき乃シヨウ城内後つまし
とき敵外圍築ノモトモあらず
又

橋とやんとも保られと見え
やうすんくそれとせよ逃と進て
二丸の櫓色トヨリ立ちてるも即ち家
と焼けた地とどくられとあ後
つのを焼とあんとくとあ
城中八百人以上が長保
長をせじふくこれとくとく
も敵又城中。いきまうぐれ
うちのり敵城つとくらりとく

まほすうしにとくも保法
かよくこのとくと守るの
自勝川あまおが陣下、もとくは
くね聖鷦の形勢とぞうみたを
速くせりよあてとまよを
ゆきせじくつゝれどもと敵兵
ち保ある守とやまつらうんを
そえんきくわんへん質をもんへ
ここのかきを保るときく傳

東を敵るをもつら城才子を全
のち敵をくつて海舟をも
よし修雄又感慨とぞく
日十九年修雄禪列ノ右近乃
のちも保海舟ノ聖兵とぞ居
秀吉が田瀬若院富田を監督
作れ先年武衛元祐と
いたる余りときも保れと
そくも罪もあらず重ノも

く津セラはへとまうと保セ
ていもく我往雄ノく忠士
の名わくさんう往雄ノ達心を
秀吉ノトモシケンヤ海あき
ムチトモスモ主君ノ財
の本いとうちらうべきうなを
こく風ノリひけりを繕フアレ
くうしを幸わんやかく津殿
の本いとうちらうべきうなを
こく風ノリひけりを繕フアレ
くうしを幸わんやかく津殿
の本いとうちらうべきうなを
こく風ノリひけりを繕フアレ
手保り可

手西目ちうたをういとれと繕
不せだうんの西目わんや手保
こくへくいと秀吉我と繕フ
せどもくめくの泥と記アレ
れとあくともまうとまうと
いふと我西目何とまうとれ
せんや津長院ちく津とまうと
左を
手保り可

お共ノ一人モミシムトハヒミセ保
又イモヘ事シのとアヨメシテ
あヒ秀吉の命レ行ベキモレ密西院
これトテモアリトモレモトモレ
ア彼ヨリくつりテ秀吉アリテ
秀吉ルレトテモのとアヒサホル
シジンとアリニ人材ケイシツ我ある
モ保が理ナ所レソトアロガ
モミシムトハヒミセ

あくやくい今彼の言葉とまじで
れ義古よりうとひく秀吉も保
づととがりく丹波の小倉に
とひく三百五十石の奉地と號せらる
のち余のく疏お金老秀林と扁
ちし庵と號すひにたをこれと
うけよのうもほ秀林の余みよ
く旗太郎と名う
わく金老と名う
文禄元年秋解陣のとき秀林が

そぞうひ 肥前高瀬屋 三月
のうちき秀林を保とす
秀吉は旗とあらゆる財とをもれ
まよあゆみが參りてゐたれ
我肩固ありと保命とすくあれ
旗とあてて秀吉の清流み徳財
秀吉前田左馬権佐とくとくを保と
すとわうとあきらめ今は

いふ一の事とゆううとゆうほ
自らところの勝負あひて白銀
八十枚とゆふとゆく秀吉ゆゑひ
せんとさうとゆく秀吉ゆゑひ
又自若一揆とゆく秀吉ゆゑひ
祖國ハ多このころ若きと云は
人れとち実ノとゆくわふ
ばあねノとゆべきをすと保れ

とありてやうへ退去と

其のうちも保山に言蕃允と不和の

とありてころりへて秀村よつけ

と辞去秀吉とれどちく徳長院

うひト宣田方をとて今ト

技打とくとへりき湯湯ト取ら

とく

大權現かと凡華人立と清つて

幕下トノ房トあくまづま

作とひゆも保秀吉の技打せども
すととくこれと辞ります

大權現かと凡華人立と清つて

も化而トフムトとおもひ
ひは我ト房セよとひと縁が

こありく そ今ト一筆とこのとき

大權現かと凡華人立と清つて

古伊勘氣とかくすむわり宣田

たを立ち

大権理のゆあつ作ト本曾母歟
こひゑくつとくよほく
汝を保と曰藏よりくを保とく
我鷹下トリとくしりとくは
本曾が事拂室也あづべとく
トシトシ考古の技術せく
トシトシとも又くとく

大権理のゆあつと保我トきく
さうしきい本曾が罷も又ゆくと

きりれりとくよくを保とく
キイイイアリ我

大権理トあえもくつとく
汝ト幕下トリとくうくよ
よも金きりやく汝を保とくい
く我ト秀吉役おとあくまも
汝きりゆく油唇院もくしとく
きりゆく何せうふとくうくじ

シヤドウウツメテ
タチタガハ

大樞理

易考

修理の湯をしれぬ
木曾毛又伊豆毛とがうぬ

ももか年

西國
四年七月京勝と征伐
久保家勘定
往來とつとめ又修列
吉田
より
吉田の御用

うのうち大済番とつゝじ

廿九年六月伊陣のとき去井

休まつとも

元和元年 大後東源乃子也

伊豆に伊豫津の江戸御城

とき忠烈ありひまほの本

と見て言ふ
も保送かのほを多ニ尔に重書
とぞいといあくも保送と
まちとしと珠と
ノロム正主と又は勇武志と
能取ほらのうりと

同九年より

將軍家ノツノモトナリ松平
お雪守勝隆ノ組ノくわいて

大済番とつもし

寛永え年正月廿日

叢令

カノウ御内袍ひとうり足輕卒
人となりづり上乗地とくもん始
同九年七月 作りしる力
入院とあつる
同十年二月 食邑とくもん始
うもと千八百石と終

安右

左太郎

生田毛助

秀忠六年

台連院敵

有徳

有徳

四十一年大坂陣のとき古井

利勝

告

あらびの役出来よ

者と大坂城中これ極計と

うそを

元和元年大坂軍陣のとき古井

徳とゆきありうのうり

將軍家の収令よりよしと古井の

徳とゆき

寛永九年六月八日死と葬年一

は名淨能

忠保

佐多尉

生田毛助

忠保や一とくよどとひの安右

子より

寛永八年

將軍家ノノノノノノノノ

安則

衆助

生國同あ

寛永元年

將軍家ノノノノノノノノ

新湯ノノノノノノノノ

田舎年より人情看シテとし

寧波

菊

法深

小門

至ハ天聖氏より改名アシタスヒヨウジヨリガムニメル
いわく小門と稱アシタスヒノミドリトシテ

宿次

天野清兵衛尉

生田二門

東照大権現

台頭院殿

大粒現傳津の事とくらべ三列
とくらべて假想がいり傳來
かと解説をうなづかし列
とくらべ傳來傳至と邦奉れと
うかがふる事とくらべて解説の
跡よろちうかれてやうの傳來よ
數度

人情況下。多以之為
津石。配以

或ちの見る所より或ひ教と申
たり残首吸とゆかと许多あり
体地と地の目と云ふものと云
候ねと八百と云ふと云ふ事
なりとゆり又而石の領地とくに
之を後河津平としもしくて亦
沙野村と云りとゆり沙野丸石九流
佐家庄の地をいり町割小
作

常刀と槍の如きこれと門を
この内にさし下絶ゆく
毛利と以て名ふるゝある
う止む力十人足らず二十六人と

毛利と
奉行官年方四十歳劫亂と
死と

丙午年十二月不冒六十七年

死と

法名性安

某

三十郎

大槍頭

毛利

元永元年四月婦

戦死と傳す歲十八

某

傳九郎

大槍頭

毛利

元龜二年夏月三月廿日
といひ數とねりい旨二段

得より二月と

大權門の事より爲九郎
御内閣制られりニ主と書とて
十九年十一月つかれ 戰勝
又家以ニ子らもあめ精舍と建立
て奉るもと手と

大權門されときうり
もち領と従合三月より

次右

水之助 のりよ清助とあつたし

家次がニ子付死とありつり
天正元年家次が報ふとあつて
七条室へす野あ郎共清政次

をもて年又家次汝勤氣と

政勝

寛永十三年八月廿九日六十九
歲めいにて死し

宇聖翁吉唐尉

天正十八年十采とさきのとき家次か
娘むすめより玄くわんひ宇野政次まさみちが
兄次おのつを天野あまのと称よめりうつゆ

政勝まさかつを氏うじとて宇聖うぜい
号ごうと宇野うのハ添そなへまわり相あい名な
幕まくの役わくと政勝まさかつが社父宇野うの
又高たか弟おとこ正重まさしげ廣忠ひろただ卿けいといひ
人情じんじやう人ひと事ことに数いく度どの爲ため
貞級じょうきゅうとゆづ

泰たい十一年百三歲さいにて死し
法名通つう以い

実父政次へ

大権現

台徳院殿（おとくいんどのん） 一揆時起（いちぎとき） のとき

大権現の津（つ） もれ傍（わき） としかれましと
れと廢（ひ） 王（おう） と身（み） と縁（縁） あ
まも七年三月十九日六十一案
うてひとのらうのよとくく
死（死） 魔（ま） 下（げ） といふ事體也

称（さう） しきのをと（と） 絶（絶） ざり政次（（まこと）（まさこ））
才三十高政林

大権現（おとくいん） 一揆時起（（いちぎ）（とき）） 二
津（つ） 有（あり） と身（み） と縁（縁） あ
改（改） 秋（（あき）（秋）） 也又二十七案（（じゅうしち）（けん）） 付死（（つけ）（死）） と
望（（まち）（め）） と女（（め）（め）） 二人（（ふたり）（ふたり）） と婦（（ふく）（ふく）） 三列（（さんれつ）（三列））
内（（うち）（うち）） 和（（わ）（わ）） と身（（み）（み）） 修（（しゆ）（しゆ）） 也と下（（した）（下））
死（死） あよと以（（よ）（よ）） てとも服（（ふく）（ふく）） と身（（み）（み）） あ

天正十八年二十一日午ノ刻

政右

白板 生田武秀

母乃氏トツメ 小川と名と
秀吉十九年某勝院政右と

大權タフチ あまんとすとすと

大權タフチ 井伊雅永忠世吉山
伯耆守右後ヒサシテウジ 令イシ

右座院歟ミツカニ 達タマハ

右座院歟ミツカニ 政右イシ 母トツメ

將軍家タクニヤ 政右イシ 又

お軍オム 誓セイ もモ 一イチ

之シテ とト 忠チヂム 右後ヒサシ 先セン 客ゲキ

右座院歟ミツカニ 神ミツカニ 丸マル

將軍事
乃
人
之
門
也

元和六年
沙勘氣
上
卷

同八年九月

清清しくあらざりせむ
遅滞の

のう余りて少小性征八

後九年又作高廟
漢文帝

寛永元年

同八年涉伊來
王氏

同十年春陰雨廉漪作于京師

同一年

將軍家御と源乃佐母と川もし
日十七日光浦村糸乃佐母

つ
し
じ

莫希政

三枝乃松

卷之三

三星

小川

三信

基至為尉 生ふまに
年も十八年 政府より
東照大権現と稱 / もくもく

右徳院殿

將軍家ノツノモニ

正長

放逐鳥羽

生國大和

寛永十年

將軍家ノツノモニ

家政

二月丙

小川

氏綱

又左衛尉 生氣を以ては名透矣
至るも十八年後府へと之れ

東照大権現と神社をさのば

名塗院歟

將軍家ノ一人として下門

氏行

九左衛尉

務別

寛永九年

將軍家ノ一人として下門

寧政

本風

